



異世界キッチンから
こんにちは 1

風見くのえ

Kunoe Kazami

RB

レジーナ文庫

登場人物
紹介

マルティン

王都の騎士団長。
紳士的な性格の
ナイスミドル。

ライバル店の
店員

顔が瓜二つな男女で、
双子だという噂。
カレンのお弁当屋に
対抗心を燃やしている
ようで……？

ウォルフ

つかさど
大地と緑を司る狼の聖獣王。
生真面目で頭が硬い。

アウル

つかさど おおひり
風を司る鶉の聖獣王。
陽気な性格で
人間にも友好的。

アスラン

つかさど
炎を司る獅子の聖獣王。
自信家で偉そうな態度の
“俺さま”だが、
カレンを大切にする
優しいところも。

カレン(大森蓮花)

おおもひ れんか
老舗のお弁当屋の看板娘。
突然、異世界にトリップして、
カレンという新しい名と聖獣を
喚び出せる召喚魔法を授けられた。
喚び出したイケメンな聖獣たちに
助けてもらいながら、
この世界初のお弁当屋を
開店する。

カムイ

つかさど
水と水を司る
シロクマの聖獣王。
心配性な
お父さん気質。

ルーカス

王都の騎士で、
外門を守る警備兵。
カレンが作った
お弁当が大好き。

目次

異世界キッチンからこんにちは
1

書き下ろし番外編

痴話ゲンカは蛇も呑まない？

異世界キッチンからこんにちは
1

プロローグ 「メンテナンスは、しっかりと！」

「いったあゝい」

真つ暗闇の中、たつた今打ったお尻をさすりながら、大森蓮花は涙目で上を見上げる。頭上には、白く光る丸い穴がポツカリと空いていた。

「いやだ、私つたら、あの穴から落っこちたの？」

そんな穴はどこにもなかったはずなのに、と恥ずかしさと痛みで顔をしかめて蓮花は思う。

夕刻。勤務先のお弁当屋からの帰り道、蓮花は道路を歩いていた。都心から電車で一時間ほどのこの町は、いわゆるベッドタウン。まだまだ開発中のため、あちこちで道路の拡張工事をしているが、蓮花が歩いてきた道で工事は行われていなかったはずだ。

「本当に、今日は踏んだり蹴ったりね」

蓮花は泣きたくなる。そのくらい、今日の彼女はついでいなかった。

朝は水たまりに足を突っ込み、スニーカーをビショビショにしてしまった。仕事中は、お弁当の数を間違えて少なく配達。早く気づいたので、昼食までには不足分を届けることができたのだが、ほかの届け先の配達を店長に代わってもらうことになった。迷惑をかけてしまったことを思い出し、蓮花は呟く。

「店長も奥さんも、気にしなくていいよって言ってくれたけど……」

蓮花の働くお弁当屋は小さな店で、従業員は店長夫婦とその息子夫婦、そして彼女だけ。幼い頃に両親を亡くし、育ての親だった祖父も高校時代に亡くした彼女は、高校卒業後この店に就職した。それから早三年、今や蓮花にとって彼らは家族同然だ。店長夫婦も若夫婦もとても仲がよく、蓮花の憧れだった。

将来は、のれん分けをもらって、同じようにアットホームなお弁当屋を自分で持つのが、ひそかな夢である。

優しい店長家族に迷惑をかけた申し訳なさで、蓮花は次第に自分に腹が立ってくる。

「とどめに穴に気づかずに落っこちるなんて、いったいどうなっているの？」

恨みがましく、蓮花は頭上高くにある穴を睨む。とはいえ、こうしていても仕方なかった。真つ暗な中でおそろおそろ四方八方に手を伸ばすが、地面以外は触れない。地面は土でもコンクリートでもない不思議な質感だ。この穴が何かも、自力でここから出る方

法も、検討がつかない。

「誰か！ いませんか!？」

恥ずかしいけれど、通りかかった人に助けてもらおうと判断して、蓮花は大声を上げた。冬場の日暮れは早い。明るいうちに気づかれなければ、助けてもらえなくなるかもしれない。

「すみません！ 誰か!!」

蓮花は叫びながら精一杯手を伸ばし、ピヨンピヨンとジャンプした。少しでも穴の近くで叫んだ方が、外に聞こえるかもしれない。

何度か跳び上がり、息がきれかった時——蓮花の足元が、ストーン！ と抜けた。

「えっ?」

急激に体が落下し、上方の穴がみるみる小さくなっていく。

「なんでっ!? どうして、また落ちるの?」

どんなに叫んでも落ちていく体は止まらない。

「いやあ〜っ!」

……やがて穴が見えなくなっても落下は続き、蓮花は意識を失った。

「——どうするんだよ、この娘? もう、うちの穴は修復してしまったから、こっちの世界には戻せないぞ」

「うちの方だって、きっちり塞かきがせたんだ。また穴を空あけるなんてとんでもない!」

なにやら言い争う声が聞こえて、蓮花の意識は、ゆつくりと覚かく醒せいしていく。

目をつぶっていても光を感じる。周囲は、どうやらかなり明るいらしい。

「だいたい、君の世界の設計が、おかしかったんじゃないか? 突然穴が空あくなんて、

普通じゃない」

「おかしいのは、お前の世界だろう! 手抜き工事もいい加減にしろ!」

口論はどんどんエスカレートし、怒鳴り合いに変わる。

うるさくって眠れない。蓮花は、「う〜ん」と唸うなって、眉をひそめた。

その途端、ピタリと言い争いの声がやんだ。

蓮花は、ゆつくりと目を開ける。思った通りの眩まぶしい光に、二、三度まばたきしながら、目を慣らそうとした。

やがてクリアとなった視界に——ただただ広い空間と、光が映る。

そう、文字通り光である。キラキラと輝くピンクの光と水色の光が、蓮花の周囲を漂たなっている。

「え？」

蓮花は驚いて声をこぼした。

誰かが言い争っていたと思っただが、誰の姿もない。そして――

「目が覚めたか？ 気分はどうだ？」

「おかしい感じはしないかい？ できるだけそつと受け止めたのだけれど」

「……おかしいと言えば、おかしい状況ですけれど」

思わず蓮花は、素直に答えてしまう。

誰もいないのに、声が聞こえるのだ。それもごく近くから。これをおかしいと言わずに、何をおかしいと言えはいいのだろうか。

「おかしい……もしや怪我をしているのか？ お前！ あれだけ、絶対傷つけるなど言っただのに」

「私が傷つけるはずないだろう！ この娘が傷ついたとしたら、君の世界の穴に落ちたせいだよ」

「バカ言え！ お前の世界に穴が空いたせいだ！」

ピンクの光と水色の光が、怒鳴り合いながら蓮花の周囲をグルグルと回り、入り乱れて明滅する。

蓮花は目がチカチカした。

「お前のせいだ！ この手抜き工事ッ神ッ！」

「君がそれを言うかい!? この設計ミスッ神ッ！」

互いに互いを責める声。さらに光の輝きが増していき――

「眩まぶしい！ やめてください！」

ついに蓮花は怒鳴った。

途端に、ピタリと光が動きを止める。蓮花の左側にピンクの光が、右側に水色の光が寄ってきた。ギラギラとした輝きが、チカチカくらいに落ち着いて……やがて明滅が止まる。

まるで生きているみたいなの、二つの光。

その様子に、蓮花は確信した。

「……光が、喋しゃべっているの？」

それでも、口から出たのは疑問形である。

「光じゃないよ。私は……私たちは、君たち人間が言うところの、いわゆるッ神ッだ」

なんと、光はそう答えた。

蓮花は夢を見ているのかと思ひ、頬をつねったり目をこすったりしたが、目が覚める

気配はない。しばらく悩んだものの、蓮花はひとまず光が話した内容を信じることに決めた。

——それから、自称^ク神^クたちは、怒涛のごとく喋り出した。

どうやら水色の光は蓮花の世界の神で、ピンクの光は隣の世界の神。彼らが言うには、蓮花の落ちた穴は、彼女の世界に歪み^{ゆが}が生じてできたものらしい。

「完璧に創ったはずなんだが、どうしてか歪み^{ゆが}が生じることがあって、数千年に一度くらい頻度でどこかに穴が空^あくんだ。モチロン、即座に修復して元に戻すんだが、今回は……」

水色の光は、そこまで話して黙りこむ。

続けたのは、ピンクの光だった。

「歪み^{ゆが}のせいで空いた穴から、君は世界と世界のはざまの空間に落ちた。そして運の悪いことに、君の落ちた場所に、私の世界への穴が丁度空いてしまっただけ」

「穴？」

蓮花の声に、ピンクの光は、ゆっくりと一度瞬^{また}く。

「信じられないことに、突然ポコッと私の世界が陥没^{かんぼつ}したんだ。急いで天使たちに修理を命じたのだけれど……その前に、君はその穴から私の世界に落ちてきた」

ピンクの神は、蓮花が自分の世界に落ちてきたことに気づかなかった。水色の神から『自分の世界の住人がそっちに落ちた』と連絡があり、慌^{あわ}てて蓮花を探し出して今に至るのだそうだ。

「できるだけ傷つけないように細心の注意を払ったが……どこも痛くないかい？」

心配そうに聞かれて、呆然としながらも蓮花は頷^{うなず}いた。

歪み^{ゆが}が生じて数千年に一度穴が空^あく世界と、突如陥没^{とつじよかんぼつ}する世界。そのタイムミンクと位置がびったり重なったせいで、蓮花は異世界に落ちてしまったということか。

「……………メンテナンスは、していますか？」

しばらく黙りこんでいた蓮花が、低い声でそうたずねた。

「メンテナンス？」

不思議そうな声とともに、二色の光が瞬^{また}く。

「維持管理と保守点検ですよ！何かを作ったら、その状態を良好に保つためのメンテナンスは、絶対必要でしょう!?きちんとやっていたんですよね？」

蓮花に怒鳴^{どな}られて、ピンクの光と水色の光が、不安定に揺れた。

もしかしてメンテナンスの意味がわからないのかもしれない。蓮花は怒りながらもくしたてた。

「定期的に見回って、おかしいところがあれば、確認して修理する！ 当然のことでしょう？」

「あ……いや、私たち神は万能で、いちいち確認しなくても異常があればすぐにわかるし——」

「そうそう。だから、どちらの世界も、もう完全に修復してあって——」

「異常があつてから対応するのでは遅いんです！ それに、どこが完全に修復できていますか？ だったら、私はどうしてここにいるんです!?!」

ぐうの音も出ない神二人だった。小さく隣またたきながら、下の方へ落ちていく二色の光。

蓮花は「はあ」とため息をついた。

「もういいです。元々はそっちのミスでも、助けてもらったのは間違いないみたいですから。……それより早く私を元の世界に帰してください。今何時ですか？ 私、朝の早い仕事に就いているんです。早く帰って休まない」と

確か明日は大口の注文が入っていたはずだ。こんな神だか光だかわからない相手に文句を言っている暇はない。

しかし彼女の言葉を聞いた途端、二色の光は今にも消えそうになって弱々しく点滅した。

「……ええと、あの、そのことなただけど……穴は修復済みだと、言っただろう？」

「すまない！」

元の世界の神——水色の光が飛び上がり、次の瞬間、蓮花の足元に下りてぺたあゝと広がる。これは謝罪の姿勢なのだろうか。やがて水色の神は大きな声で叫んだ。

「結論から言うと、お前は元の世界には帰れない！」

蓮花は、ポカンと口を開ける。

「帰れないって……」

そういえば、先ほど夢うつつでそんな言い争いの声を聞いた覚えがある。

「本当にすまない！——俺の世界の修復作業は、最初に力を注そそげば後は世界が自動的に歪ゆがみを直していくんだ。穴も何もなかったかのように塞ふさがる。その過程で……お前を、その、……拾い損ねた」

「拾い損ね……」

「つまり、俺の世界では、すでにお前がいけないものとして修復が完了したんだ」

心底申し訳なさそうに、水色の神はそう言った。

「そんな……そんな、だって！ 私は……明日の、私の仕事は？」

「それも、もう修復済みだ。お前はすでにあの店を辞めたことになっている。やむにや

まれぬ事情でお前は遠くに去った。お前を心配しながら、弁当屋の家族はこれからの日々を過ごすだろう。……あ、でも大丈夫だ、安心しろ。すでに求人を出している」

そんなことを言われても、ちっとも安心できなかった。

「それに、私の世界の方もすでに穴を修復済みでね。君をこの世界から出すためにもう一度穴を空けることは、できないんだよ」

ゆらゆらと揺らめきながら、ピンクの神までそう話す。

「ただ、安心してほしい。私の世界にも人間がいる。まあ、いるのは人間だけじゃないけれど。……多少文化や環境が違ってても、君が生きていくのにそれほど問題はないと思う。それに、君が生きやすいように、加護を与える。……だから、お願いだ。カレン、自分の世界に帰るのは諦めて、私の世界で暮らしてくれないか？」

ピンクの神は、何故か蓮花のことを「カレン」と呼んだ。

明らかに自分のものではない名前。なのに呼ばれた途端、彼女は自分が「カレン」で、これは現実なのだ強く感じた。そしてもう帰ることはできないのだと納得する。

「お前！ 名前を与えるのは、この娘が同意してからだと言っただろう！」

怒る水色の神に、ピンクの神が冷静な声で返す。

「どうせ彼女に選択肢はない。——私たちが、そうしてしまっただ。遅かれ早かれこ

うなる。だったら先に「名」を与えてしまった方が、彼女も諦められる」

水色の光は、ピタリと動きを止めた。

カレンは身震いする。今の今まで気温を感じなかった空間が、何故か急に寒く感じられた。

「カレン、ごめんね。……私は、君を元の世界に帰してあげられない。その代わり、君の望むものならどんなものでも与えよう。地位でも、名誉でも、力でもね」

ピンクの神が話す間も、カレンの体から徐々に熱が奪われていく。カタカタと震えだしたカレンの体を、ピンクの光が包みこむ。

「ああ、名前をもらって、体がこちらの世界の環境になじんできているんだね。……ここは、本来なら人間が生きていけないくらい高い場所なんだよ」

ピンクの神の声が、少し遠くで聞こえた。カレンの体は寒さに耐えかね、感覚を失ってきているらしい。

「私の世界は四層になっていてね。ここは、一番高い第一層。……人間の住む世界は第三層なんだ。早く君をそこに降ろさなければ、命が危ない。……さあ、望みを言って。前の世界に帰ること以外なら、どんな望みも叶えてあげる」

優しい言葉と光で、カレンを包みこむピンクの神。

カレンは、弱々しく首を横に振った。
 (……私の、望みは、帰ることだけよ)
 すでに言葉を発することもできない。

「違うよ。君にはもつと強い、どうしても叶えたい望みがあるはずだ。……思い出して、カレン。君の本当の望みを」

声にならないカレンの思考を、ピンクの神は拾っていた。

そんな望みあるものか！ と思ったカレンの心の中に、願いが浮かび上がる。——両親と、あるいは祖父と一緒に暮らしていた頃みたいに、家族を……どうせならもつと大勢の大家族をつくりたい。

いつも賑やかで、一緒に笑ったり怒ったり、泣いたりできる大家族を得ること。それは、身寄りがいないカレンの、心からの望みだった。そしていつか、勤め先のお弁当屋さんへのれん分けをしてもらって、アットホームな自分の店を持ちたい。

ピンクの光が、優しく瞬く。

「大家族か。ステキだね。でも、たった一人で私の世界に落ちる君が、すぐに家族を得るのは難しいだろう。……ならば、私は君に、どんな者とも言葉を通じ合わせることができる『翻訳魔法』と、『召喚魔法』を与えよう。召喚した者とされた者は、絆で結ばれる。

それは、家族と同じくらい強い絆となるよ」

ピンクの神の音が、頭の奥で響く。もう、カレンは目を開けていられなかった。瞼を閉じても感じていられた光が、徐々に消えていく。

「……っ！ お前に祝福を！ カレン、私の子！ ……この世界で、お前の望みが叶うように！」

最後に水色の神の音が聞こえた。後悔のにじむその声に、『これからは、ちゃんとメンテナンスをしてください！』と願いながら、カレンは意識を失った。

第一章 「召喚獣とウサギリンゴと人間の町」

カレンが目を覚ましたのは、広い草原の真ん中だった。大きな広葉樹の木陰で、彼女は眠っていたらしい。

カレンは、ゆっくり体を起こした。周囲を見渡し、そのままガツクリと項垂れ、頭を抱える。

木漏れ日がチラチラと体の上で遊び、そよ風がザワワと葉を揺らす。

チチチという小鳥の声と、ジリリという虫の音。

(……夢だったらいいなと思ってたけど……やっぱ、現実なのよね?)

カレンは、冷静に状況を把握した。

あたり一面が、緑だ。三六〇度、果てしなく広がる大地には、建物はおろか山の影すら見えない。

「どうしろっていうのよお〜!」

カレンは、大声で叫ぶ。

彼女の声に驚いた小鳥が、近くの木からバツ! と飛び立ち、青い空に消えていった。その姿を目で追ったカレンは、今度は、ハァ〜と大きなため息をつく。

澄みきった空に、輝く太陽と白い月が浮かんでいる。——しかも、月は満月だ。

「……ありえないから」

満月の場合、地球から見えて月は太陽の反対側にあるため昼間見えることはない。ここが地球でないことは明らかだった。

「つまりここは異世界で、私はこれからここで生きていかなきゃならないってことよね」
声に出すと現実感が増す。

気づけば涙が頬を伝っていた。

「……明日のお弁当、間に合うかなあ」

元の世界は、もうすでに「蓮花」がないこととして修復されたという。それでも、勤め先の弁当屋に大口注文が入っていることには変わりない。「蓮花」がない分、明日はお店の人たちが大忙しだろう。

「迷惑かけちゃうなあ」

ポツリと呟いて、カレンは、さめざめと泣いた。

……泣いて、泣いて、泣いて、やがて、顔を上げる。このまま泣いていても何にもならないこ

とは、よく知っていた。両親を早くに亡くし、頼りにしていた祖父まで亡くしたカレンは、悲しいかな逆境には慣れている。

「それに……お腹減ったあ」

泣くの中には、案外体力が必要だ。精神的に立ち直れば、空腹が襲ってくる。お昼にお弁当屋の賄いまかなを食べたきり、カレンは何も口にしていなかった。

「どうするかなあ」

ポツポツと独り言を呟つぶやきながら、カレンは周囲を観察する。

しかし見渡す限り草原で、この現状を打破できそうなものは何もなかった。

「確か、あのピンクの神さま、この世界にも人間がいるって言っていたわよね？」

しかし、ここにはいそうにない。いったいここはどこで、どうしてピンクの神は、こんな何もないところにカレンを移動させたのだろうか。

「何か、加護を与えるって言っていたけれど………えっと、翻訳魔法と、召喚魔法？」

翻訳魔法は、文字通り言葉を翻訳してくれる魔法だろう。確かに異世界ではとても役立つ魔法だとは思いますが、肝心の話す相手がいないのでは、ありがたみも失せるというものだ。

一方の召喚魔法といえは、ゲームやマンガでよくある魔法だ。魔法陣やカードなどの

アイテムを使い、呪文を唱えて、悪魔やドラゴンといった力のある生物を呼び寄せる。

「私は、魔法陣なんて描けないし、アイテムも持っていないわ。第一、呪文だって知らないし……」

どうすればいいのかと、カレンは悩む。しかし答えが出るはずもなく、腹が立ってきた。

「だから、メンテナンスもそうだけど、アフターサービスが不十分なのよ！ 能力だけ与えたって、使い方の説明がなければ、どうにもできないでしょう！」

カレンの怒鳴り声は、青い空に吸いこまれて消えた。

当然、どこからも返事はない。

絶望したカレンは、そのまま仰向けあおむにバツタリ倒れる。すると遙か上空に、飛行機雲が見えた。

「何か飛んでいるの？ 飛行機は見えないけれど……エンジンの排気じゃなくて、気圧変化でできる飛行機雲もあるんだっけ？」

目を凝こらせば、謎の飛行物体がものすごいスピードで上空を飛んでいた。青い空に一直線の白い雲が伸びていく。

翼はねにもすがる思いで、その先頭部分に向かって、カレンは両手を伸ばした。

「お願い。助けて」

その瞬間——カレンは手のひらに、燃えるような熱を感じた。同時に両手から、カッ！と閃光が放たれ、あまりの眩しさに目をつぶる。

直後、ヒユウウウ〜と、風を切る音が聞こえてきた。

「え？」

慌てて目を開ければ、空からカレンめがけ、何かが落ちてくる。

「えええええっ!？」

カレンは、慌てて立ち上がった。このままじゃ、ぶつかって死んでしまう。

周囲を見回したカレンは、すぐそばの大樹に駆け寄ると裏に回り、幹にしがみついた。

ギユツとカレンが身をすくめると同時に、ドォォーン！と音がして、大地が激しく揺れた。爆風が巻き起こり、大樹もユサユサと揺れる。

（いやあああつ！ まだ死にたくない！）

大家族をつくるどころか、好きな相手にもまだ出会えていない状況で死んでたまるものか、とカレンは思う。

必死で樹にしがみついているれば、徐々に風がおさまっていく。パラパラと木の葉が落ちてくる中、カレンはおそろおそろ顔を上げる。

「——クソッ！ 誰だ。こんなに急に、喚ぶなんて」

忌々しそうな低い声が聞こえた。

草が薙ぎ払われ、大地に穴ができていく。その中心に、一頭の大きな生き物がいた。

（……ライオン？）

それは、一見ライオンに見える生き物だった。頭から首、背中にかけて豊かなたてがみを備えた四足の獣。体長四メートルくらい、体高は二メートルはあるだろうか。ものすごく大きいけれど、外見は確かにライオンだった。

カレンは呆気にとられて、その姿をまじまじと見つめる。

（でも、真っ赤で……翼がある）

そのライオンの背中には、猛禽類のような立派な翼があった。そして、全身炎を思わせる赤色なのである。

カレンが獣を見ていると、赤いたてがみが揺れて、首が動いた。それだけで感じる威圧感と迫力、そして神々しさに目を奪われる。

獣はカレンの方を向いた。青紫色の目と、目が合う。

カレンの胸が、ドキンと高鳴った。

獣は、ゆっくりとカレンの方に歩いてくる。大きな口が開いて、鋭い牙が現れた。

「……お前が、俺を、喚んだのか？」

低い声で問いかけられて、カレンは声もなく頷く。

これが、カレンと、彼女のはじめての召喚獣——アスランとの出会いだった。

それからしばらく後——

「召喚陣も、呪文もなしで、召喚？」

赤髪の青年があきれたように声を上げた。

「そうよ。だって、私、そんなの何も知らないもの」

あきられたのがちよっぴり悔しくて、カレンは口を尖らせる。

一本の大樹と、広がる緑の草原。その草原の一カ所にポツカリ大穴が空いているのは、先刻までと何も変わらない。そこでカレンは、赤髪の青年と話していた。

翼の生えたライオンの姿は、どこにもない。カレンの目の前にいる青年こそが、赤い獅子の召喚獣、アスランだった。

見上げるほどに大きな姿をしたライオンと話を始めると、カレンは「首が疲れる」とこぼした。その途端、神々しい獣はあっさり人型に姿を変えてくれたのだ。

一つにくくった深紅の長髪と、青紫色の目を持つ、均整の取れた長身の青年。彼はものすごくイケメンだった。

そのイケメン——アスランは、眉間にしわを寄せる。

「ありえない。いくら神に与えられたとはいえ、お前の召喚魔法は無茶苦茶だ。普通、俺ぐらいの聖獣を召喚するには、緻密な召喚陣を一つの町ぐらいの規模で描く必要がある。それから数千頭の生贄を捧げた後、十日間不眠不休で呪文を唱え続けなければならぬはずだ」

カレンは、目を見開いた。

「そんな！ 十日間も不眠不休なんて、とても無理でしょう？」

「そう。要するに不可能だということだ」

きっぱりとアスランは断言した。

ちなみにこの世界の暦では、一週間は十日。一カ月は五週、一年は八カ月だそうだが、つまり、一年は四百日である。

十日間呪文を唱え続けなければ召喚できないほどの聖獣アスランは、いかにも不本意だという顔で、ギロリとカレンを睨んだ。

「そんなことも知らない人間が、俺を召喚するなんて」

どうやら彼は、自分があまりにも簡単にカレンに召喚されてしまったことが、気に入らないらしい。

その一方で、彼はカレンがこの世界の人間ではないことと、ここに来た経緯をすぐに信じた。この世界の神様から召喚魔法を授けられたことも納得したらしい。

「なるほど。神に力を授けられたから俺を喚び出せたのか。まあこの俺を召喚すること自体、普通の人間にできることじゃないからな」

当然とばかりに話すアスラン。

召喚したカレンを主と認めたらしいが、最初からカレンを呼び捨ててしてきた。さらにはカレンに、自分のことも「アスラン」と呼べと言ってくる。尊大で強引……こういう人を「俺さま」と呼ぶのかもしれない、とカレンは思う。

「まあいい。召喚されてしまったものは、仕方ない。……お前の願いはなんだ？ さつさと望みを言え」

ものすごく高飛車に、アスランはそう言った。

「望み？」

「そうだ。聖獣を召喚したからには、何か叶えたい望みがあるんだろう？ そのために神から召喚魔法を授けられたのだと、さつきお前が言っただろう。……早く望みを言ってくれ。お前の願いを叶えないことには、俺は聖獣界に帰れないからな」

きれいな青紫の目がカレンを促す。

その目に見惚れながら、カレンは、困ったように首を傾げた。

「えっと。……私が、神様に願った望みは、個人的なことなだけだ——」

ためらうカレンに、アスランは顎をクイツと上げて、その先の言葉を催促する。

「——『家族』が、欲しいなって」

カレンの願いを聞いたアスランは、青紫の目を見開いてピタリと固まった。

「家族とは、なんだ？」

アスランの問いに、カレンは、目を丸くした。

彼いわく、聖獣には家族という概念がほとんどないらしい。生まれ落ちた瞬間から自立する力を持ち、生きるのに他者の力を必要としないので、群れることも滅多にない。

自らの子孫を残すため雌雄が番うことはあっても、子をなせば関係は終わるといふ。

聖獣であれば、どんなに弱いものでも、単独で生きていけるのだそうだ。

だから、アスランには、家族が何かわからない。しかし説明しようにも、人間にとっても非常に難しい質問だとカレンは思う。答えは人によって様々だろう。

「えっと、家族ってというのは、配偶者——聖獣にとつての番や親子、兄弟といった血のつながりのある人のことよ。でも、血がつながっていなくても家族になれるって、私は思ってるの。……ずっと一緒にいることが当たり前で、離れてしまったら、ものすごく

寂しくて泣いちゃうような存在だと思っただけだ」

考えながら小さく呟いたカレンの言葉に、アスランは眉間にしわを寄せた。

「よくわからないな。そんな難しいものに、俺になれというのか？」

「すぐにそうなるものじゃないのよ。ずっと一緒にいると、自然にそうなるというか、なんとというか——」

はつきりしないカレンの言葉に、アスランはムツとした顔で口を開いた。

しかしそのタイミングで、カレンのお腹が、グウーと鳴る。……そういえばカレンは、とつてもお腹が空いていたのである。なんとも情けない表情になるカレン。

アスランは、開いた口をそのまま閉じた。そしてため息をついて呟く。

「そうだな。……人間は、食べなければ生きていけない生き物だった」

額の髪をかき上げながら、彼はカレンに近づいてきた。

お腹の音で言葉を遮ったことに腹を立てたのかと思い、カレンは焦って抗議する。

「なっ、なによ？ だって、仕方ないじゃない！ 私は、もうずっと食べていなくて——って！ きゃあっ！」

彼女の言葉は、途中で悲鳴に変わった。何故なら、近寄ってきたアスランが、カレンをサッ！ と抱き上げたからだ。

いわゆるお姫さま抱っこの体勢になり、カレンは慌ててアスランの首にしがみついた。「食べられる木の実のある場所に連れていく。しっかりと掴まっっている」

次の瞬間、バサリと音がして、アスランの背中に、赤い翼が出現する。大きな翼を二、三度羽ばたかせたアスランは、カレンを抱いたまま空に飛び立った。

「ひえええっ！」

突然のことに、カレンは情けない悲鳴を上げる。なお強くアスランに抱きつけば、彼は眉間のしわを、これ以上ないほど深くした。

カレンの髪が風になびき、肌の上をすべる。彼女は自らの服装をあらためて見て、胸を撫で下ろした。

ジーンズとVネックのチュニック、ジャケットという、仕事用のラフな格好だ。いささか女性らしさに欠けるが、スカートでなくてよかったと、しみじみ思った。

しがみついたアスランの体は筋肉がつき、がっしりとしている。一見細身に見える彼だが、カレンの両足と腰を抱える腕は揺るぎなく、とても逞しい。

しばらく飛び続けていると、恥ずかしさはあるものの、不思議なくらい恐怖を感じなくなってくる。アスランがカレンを落とすことは、絶対ないと信じていることができた。視線を上げれば、自信に満ちたアスランの顔がそこにある。

出会って、まだほんの少し。俺さまで、不機嫌そうで、見せるのは眉間にしわを寄せた顔ばかりだ。それに、人間味が少々薄い。

でも彼は、カレンのお腹が鳴ったのを聞いて、食べ物がある場所へ連れていってくれようとしている。少なくとも、この世界に来たばかりのカレンを放り出すような性格でないことは確かだ。

(聖獣って、笑ったりするのかしら?)

ピンクの神は『召喚した者とされた者は、絆で結ばれる』と言った。

(ちっとも、そんな風には思えないけれど。……でも、笑った顔くらい見てみたいわ)

とんでもなくイケメンで、しかも本来は深紅のライオンであるアスラン。

(最初に目が合った時に、ドキドキしたけれど……それは、大きなライオンの姿だったせいよね。……きつと)

カレンは自分に言い聞かせるように心の中で呟く。今ドキドキしているのは、空を飛んでいるからだろう。

アスランがバサリと翼を羽ばたかせ、なお高く飛翔した。

カレンの心境をよそに、眼下の景色を示しながら、アスランはこの世界の説明をはじめた。

「——俺たち聖獣の住む聖獣界は、この上の第二層にある。ここは第三層の人間界。聖獣界の上には神の住む天界があって、人間界の下には魔獣が住む魔界がある。それぞれの世界は円盤状で浮かんでいて、四層で一つの世界を構成している」

先ほどまでカレンのいた場所は、大海上に浮かぶ小さな島々の一つだった。遙か彼方に、大陸が霞んで見える。その大陸は四つの国に分かれていて、各国に人々が暮らしているそうだ。

世界が地球のような球状でないことに、まずびつくりする。

「四層の円盤状の世界なんて……じゃあ、この海の果てはどうなっているの?」

驚きながら、カレンはたずねた。

「果ての向こうは虚無だ。海水はそこに落ちて消えていく。四つの世界を巡り巡ってまた雨として元の世界に降ってくるのではないかと考えている奴もいるが、事実はわからない。……気になるなら、これから、果てまで飛んでいって、見せてやろうか?」

こともなげにアスランは、提案してくれた。

カレンは、慌てて首を横に振る。世界の果てにある虚無なんて、近づきたいとは思えない。

「四つの界の中で、行き来できるのは聖獣界と人間界だけだ。とはいえ、人間に階層を

渡る能力はないから、移動するのは聖獣だけだな。……聖獣と人間の能力は違いすぎる。だから、基本的に聖獣は人間界に手出しできないことになっている。……その例外が、召喚魔法で喚ばれた場合だ」

人間が自らの魔法で聖獣を召喚した場合のみ、聖獣は人間に力を貸し、人間界で力をふるってもいいことになっている。聖獣といっても多種多様なので、小さくて弱い聖獣ならば、比較的簡単に召喚できて、力を貸してもらえるのだそうだ。

「人間に召喚されても、聖獣のメリットはほとんどない。ただ、人間という生き物は、弱いくせにいろんなものを利用して面白いものを作り出したりするからな。奴らが作り出すものに興味津々な聖獣も、中にはいる。そういう奴は、積極的に人間の召喚に応えているらしい。そうそう、召喚の対価として一番人気なのは、酒だな」

そんなことを言いながら、アスランは隣の島に下りていく。

「ほら、この実はシャキツとした食感で美味いぞ。瑞々しいし、栄養も豊富で、甘みと酸味のバランスがとれている」

とある木の下に着地したアスランは、カレンを地面に下ろすと、木になっていた赤い実を二つ採った。一つを彼女に差し出し、残りの一つは自ら皮ごとかじりついて食べて見せる。

美味しそうに咀嚼するアスラン。しかしカレンは、その実に手を伸ばせなかった。

「どうした、腹が減っているんだろう？」

確かに、お腹はペコペコだ。でも——カレンは先ほどのアスランの話が気になって仕方がない。

「……召喚には、対価が要るのね？」

声を絞り出し、カレンはたずねた。

「は？」

「……私、あなたにあげられるようなものを、何も持っていないわ」

先ほどのアスランの説明からして、聖獣を召喚した人間は、何か聖獣の気に入るものを差し出さなければならぬのだろう。

しかし、我が身一つでこの世界に落ちてきたカレンが、そんなものを持っているはずがなかった。

カレンが対価を払えなければ、彼はこのまま彼女を置いていなくなってしまうのだろうか？

（私、また、一人で放り出されるの？）

会ったばかりだし性格が難がありそうなアスランだが、それでも一人ぼっちになるよ

りは、いてくれた方が、ずっといい。

一人になると考えただけで、カレンの目に涙がにじんできた。

「なっ！ おい、待て、泣くな！ ああ、もうっ！ 俺は、対価なんて望んでいない」
焦った様子で、アスランはカレンの顔を覗きこんできた。膝を曲げて、カレンと視線を合わせてくれる。

「言っただろう。お前の望みを聞くと。……召喚された聖獣は、召喚主の願いを叶えるまで聖獣界に帰ることはできない。それに対価は、召喚する際に示されるものだ。お前は、対価を示さず俺を召喚した。だから、対価について心配する必要はない。……だいたい、お前の望みは、俺に家族になってほしいというものだっただろう？ 家族つてやつは、対価を払ってなるものなのか？」

大きな声で説得されて、カレンはふるふると首を横に振った。アスランの勢いに驚きすぎて、涙も引っこんでしまう。

アスランは、ホッと息を吐く。

「俺の言い方が悪かった。聖獣の中には、人間からもらう対価が目当ての奴もいる。でもこうも言っただろう——召喚されてもメリットはほとんどないつて。人間の差し出す対価は、聖獣にとってどうしても必要なものではないんだ」

「じゃあ、聖獣は何故人間に召喚されるの？」

「俺には、わからない。俺だって好き好んで召喚されたわけではないしな。まあ、お前の力は桁外れだし、俺みたいなケースは滅多にないだろうが。……そうだな。人間に召喚された奴の中には、召喚が聖獣の心にやすらぎを与えてくれる、と言っていた者もいる」
「やすらぎ？」

聞き返すカレンに、アスランは頷く。

「さっきも言ったように、聖獣は単体で生きる。聖獣同士で争うことも、ほほない。たまに強いもの同士で力比べをすることはあるが、あくまでそれは自らの力を試すため。他者を利用したり、他者と協力したりすることはない。各々のテリトリーも確保されているから、互いに干渉せずに自由に生きている。……だが召喚に応えた奴は、人間とながってはじめて気づいたらしい——自分が一人だったということに。そして世の中には、一人ではなく、誰かとながって生きていく生き方があることを知ったそうだ」
アスランの青紫の目が、遠い空を仰ぐ。

「……つながって？」

「ああ。——俺には、さっぱりわからない感覚だがな」

そう話すアスランが、カレンには何故か少し寂しそうに見えた。

偉そうで強引……でも、優しいところもあるカレンの召喚獣。空を見上げるその姿は絵画にしたいくらい美しく、うっとり見惚れたカレンだったが——お腹が、グーッと、鳴った。

アスランが、びっくりした顔でカレンを見る。

「だ、だって……!」

真っ赤になったカレンの姿に、アスランは「ブッ!」と、嘔き出した。

「ハハ! ハハハッ! 元気のいい腹だな」

おかしくてたまらないと言うように、アスランは笑い続ける。

カレンはポカンとして、彼を見た。

(……笑えるんだ)

声を上げ体を揺らし、笑うアスラン。

カレンは、ずっと彼の姿に見惚れていた。

その後、ようやく笑いをおさめたアスランは、あらためて木の実を差し出してくる。カレンはちよつと膨れつつ、シャクシャクと、その実を食べはじめた。

実の真っ赤な皮の下は白く、歯触りといい味といい、どこことなくリンゴに似ている。

「しっかり食べるよ」

まだ時々クスクスと思い出し笑いをしながら、アスランはカレンを見ていた。

「……笑いすぎでしょう」

「悪いな」

アスランは謝ってすぐにまた笑うと、次の木の実を採ろうとする。

「ま、待って! 私、もう、そんなに食べられないわよ」

甘くてとても美味しいのだが、拳大ほどの大きさの実を何個も食べられるはずがなかった。

「人間は少食だな。それとも、カレンが少食なのか?」

首を傾げたアスランは、カレンの制止を聞かずに実を採ると、ヒョイと自分の口に入
れ、あつという間に食べてしまう。

その後もどんだん実を採って食べるアスランに、カレンはたずねる。

「聖獣は、草食なの?」

「うん? ああ、別になんでも食べられるが、どうしても食べなきゃいけないものはないな。聖獣は、食事からエネルギーを取っていないから」

「え?」

「聖獣のエネルギーは、大気の中に溶けこんでいるマルナと呼ばれる成分だ。人間は魔素と呼んでいる」

大気の中にふんだんにあって、決して涸れることのないマルナ。人間は魔法を使う時、マルナを体内に取りこんで使うのだという。

「魔法の素だから、魔素と呼ぶらしい。……ただ、人間が取りこめるマルナの量は微々たるもので、魔法を使うには足りない。魔法を使えるほどマルナを取りこめるのは、ごくごく一部の者だけだ。反対に俺たち聖獣は、生まれた時から呼吸をするのと同じようにマルナを摂取している。器の大ききで使える魔法の力の強弱はあるが、マルナさえあれば聖獣は生きていけるし、魔法も使い放題だ」

食事は聖獣にとって必要不可欠なことではないが、味覚はあり美味いという感覚がわかるため、楽しみのために食べているのだそうだ。

そう話しながらも、アスランは五個目の実をたいらげる。

これだけ大食漢の聖獣が食事が必要としたら、野山の果樹はあつという間に丸坊主になってしまいうさだ。

(果実だけじゃないわ。肉だってお魚だって、食べようと思えば食べられるのよね)

聖獣が食事が必要としないことは、この世界にとって幸いなことかもしれなかった。

美味しそうに木の実を食べるアスランを、カレンはジッと見る。そのまま考えごとをしていると、彼が不思議そうな顔になった。

「ん？ どうした。やっぱりもつと食べるか？」

「あ、ううん。違うの。……アスランに、私の作ったお弁当を食べてほしいなって思ってきつとアスランは、お弁当も喜んで食べてくれるだろう。」

「オベントウ？」

口についた果汁を舌でペロリと舐めながら、アスランは首を傾げた。イケメン召喚獣のそんな仕草は、ものすごく色っぽい。

カレンの頬が急に熱くなる。

「あ、あ、うん。お弁当っていうのは、箱に詰めた食事のことよ」

そもそも食事をとる必要のない彼は、お弁当を知らないのだろう。カレンはお弁当の説明をはじめた。

「蓋のついた入れ物に、調理された食べ物を入れていって、外出先で食べるの。こんな風以外で食べることもあれば、建物の中で食べることもあるわ。出かけた先に、食べ物があるとは限らないでしょう？」

「……調理って？」

またまた首を傾げるアスラン。なんと、そこから説明が必要らしい。「調理っていうのは、食べ物を切ったり、火を通したり、味つけをしたりして、食べやすくすることよ」

「なんでそんなことをするんだ？」

「だって、調理しなきゃ食べづらいものや食べられないものがあるでしょう？」

「食べられないものを、わざわざ食べる必要はないだろう？」

「人間は、それだけじゃ生きていけないのよ。あと、調理することで、食材を美しく見せたり、より美味しくしたりすることもできるのよ」

どう説明すればわかってもらえるだろうと考えたカレンは、ふと手の中にある果実に目を留める。

（そうだわ！）

「アスラン、包丁か果物ナイフを持っている？」

百聞は一見にしかず。実際にやってみた方が伝わりやすいだろう。

しかし、アスランは訝しげな顔になる。

「ホウチヨウ？ クダモノナイフ？ それはなんだ？」

立派な牙と爪を持つライオンの聖獣であるアスラン。彼に、刃物など必要なはずもない。

どうすればよいのかと考えこみながらも、カレンは、包丁や果物ナイフの説明をした。

「それは、人間が持っている剣でもいいのか？」

「えっと、あまり大きな剣は困るけど、短剣なら」

カレンの言葉を聞いたアスランは一つ頷く。右手を差し出し、目を閉じると――

次の瞬間、アスランの手の中には小振りな短剣が一本握られていた。

「え？ スゴイ！ どうしたのこれ？」

目を丸くするカレンに、アスランはフンと笑う。

「空間転移の魔法で、聖獣界にあったものを取り寄せた。聖獣の中に、人間の作り出すものに興味津々な奴もいると言っただろう。以前そういった奴と戦ったことがある。もちろん、俺の圧勝だったけど、その時の戦利品の中にこれがあったんだ。召喚の対価として得たものらしい。……せしめた時は、なんだこんなものと思ったが……これで、いいか？」

よく見れば、短剣は美しい鞘のついた、たいそう立派なものだった。召喚の対価であるからには、とても高価なものなのかもしれない。こんな高そうな短剣を使っているのかと迷ったが、カレンは仕方なくその短剣を受け取った。

近くで拾った硬い葉を数枚重ね、まな板がわりにする。その上でリングに似た実を六

つに切って芯を取り、一切れの皮の両端から真ん中に向かって切れ目を入れていき――
「できた！」

カレンが作ったのは、ウサギリンゴ。だった。
「どう？」

短剣を左手に持ちかえてアスランの目の前にそれを差し出せば、赤い髪の青年は、目をパチクリさせる。

「これは？」

「同じ木の実でも、切って形を整えると、また違う感じになるでしょう？ 食べてみて」
彼女が差し出したウサギリンゴを、アスランはジッと凝視する。

「えっと、そんなに見なくても……あ！ ひょっとして、この世界には、ウサギがないの？ だったら、何かほかの耳の長い動物だと思ってくれたらいいんだけど……」

ジッと動かないアスランに、カレンはだんだん不安になってきた。

（子供だましてみたいに思われたのかしら……）

視線に耐え切れず、手を引っこめようとした瞬間。アスランは急に動き、カレンが持ったままのウサギリンゴにパクリとかじりついた。

シャクシャクと二口で食べ終えたアスランが、勢い余ってカレンの指まで口に含む。



「へ？ え、きゃあっ！」

悲鳴を上げる彼女にかまわず、アスランは笑みを浮かべた。

「美味い！」

アスランは満足げにそう言った。なんだか興奮気味だ。

「不思議だな？ まるごとかじると味は変わらないはずなのに、こっちの方が美味いと感じる。もっと、作ってくれ！」

残りのウサギリリングもあつという間に食べ終え、アスランは次を催促した。

こんなに気に入ってくれるとは思ってもみなかった。カレンは戸惑いながらも、またウサギリリングを作る。ちなみにこの世界にも、ウサギに似た動物はいるらしい。

結局この後、カレンは五個の実を三十個のウサギリリングにした。

そのすべてを、アスランは嬉しそうに食べた。それでも飽き足らず、彼が次を催促するものだから――

「いくらなんでも食べすぎよ！ 木を丸坊主にするつもりなの！」

カレンの怒鳴り声が、無人島の青い空に響き渡ったのだった。

そうして山ほどのウサギリリングを食べた後。

「調理というのは、すごいものだな。カレンが言ってたお弁当も食べてみたくなった」

眉間のしわをすっかり消したアスランが、真面目な顔で言ってくる。

「今のは食材を切っただけだけど……嬉しいわ。ただ、今の状況じゃ、お弁当なんてとても作れない。もっといろんな食材や道具がなくっちゃ」

カレンの言葉に、アスランは少し考えこんだ後、質問する。

「食材とは？」

「お肉やお魚、野菜、穀物とか、調味料のことよ」

普段お弁当を作る時に必要な食材を、指折り数えるカレン。

アスランはふーんと頷くと、また聞いてきた。

「道具とは？」

「包丁にまな板、お鍋にフライパン、お玉に菜箸。ポウルや計量道具なんかも、料理には必要なの」

地球では普通に使ってきた調理器具も、一から作るとなればたいへんなことだ。ほかにも食器やコンロ、冷蔵庫などの家電製品も要ることを考えれば、お弁当への道のりは果てしなく遠いと言える。

「この世界に、冷蔵庫とかオーブンってあるのかしら？ 人がどうやって調理しているのか、アスランは知っている？」

文化も文明の度合いもわからないが、人が暮らしている以上、料理はするだろう。食文化の違いはあっても、基本の道具はそれほど違わないと思われる。

カレンの質問に、アスランはあっさりと言を横に振った。

「俺は、今まで人間に会ったことがない。カレンがはじめてだ」

はじめてという言葉に、カレンは、ちよつとドキツとしてしまう。

「人間の住んでいる場所に行けば、食材や道具が手に入るかもしれないんだけど――」

カレンの言葉に、アスランは眉間にしわを寄せる。

（ああ！ せっかく、なくなっていたのに）

しわを伸ばすため、カレンは彼の眉間に手を伸ばそうとするが――

「なんだ？」

怪訝けげんそうにアスランに見られて、伸ばしかけた手を慌あわてて引っこめた。

（私ったら、何をしようとしているの？）

自分で自分がわからない。

アスランはカレンが答えないので見て、首を傾なげてから口を開いた。

「人間の町に行くのは、反対だ。俺は人間の常識がわからないし、お前はこの世界のことを何も知らない。行ったところで、どうすれば食材や道具が手に入るのかもわからない

いだろう」

それはそうかもしれないけれど、このままでは料理なんて夢のまた夢だ。今後カレンは一生、木の実しか食べられないかもしれない。

（ムリムリ、絶対ムリ！）

カレンは基本的に料理好きだし、何より食べることが大好きだ。木の実だけの食生活なんて、耐えられるはずがない。

「えっと。……あの、さっき言っていた、人間に興味のある聖獣に教えてもらうことはできないかしら？」

カレンの言葉を聞き、彼は派手に顔をしかめた。

「……あんな奴に頼りたくない」

どうやらアスランは、その聖獣が嫌いらしい。

しかしカレンとて、今後の食生活がかかっているのだ。意地や好き嫌いの問題で、諦めるわけにはいかない。どう説得しようかと考えて――

「食材や道具があったら、もっと美味おいしい料理をたくさん作れるんだけどな」

カレンは、ものすごく残念そうに呟つぶやいた。

するとアスランの耳が、ピクリと動く。